**復活節第5主日礼拝説教　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2023年5月7日**

**「祝福しながら」**

**レビ記9章22～24節**

**9:22 アロンは手を上げて民を祝福した。彼が贖罪の献げ物、焼き尽くす献げ物、和解の献げ物をささげ終えて、壇を下りると、**

 **9:23 モーセとアロンは臨在の幕屋に入った。彼らが出て来て民を祝福すると、主の栄光が民全員に現れた。**

 **9:24 そのとき主の御前から炎が出て、祭壇の上の焼き尽くす献げ物と脂肪とをなめ尽くした。これを見た民全員は喜びの声をあげ、ひれ伏した。**

**ルカによる福音書24章50～53節**

**24:50 イエスは、そこから彼らをベタニアの辺りまで連れて行き、手を上げて祝福された。**

 **24:51 そして、祝福しながら彼らを離れ、天に上げられた。**

 **24:52 彼らはイエスを伏し拝んだ後、大喜びでエルサレムに帰り、**

 **24:53 絶えず神殿の境内にいて、神をほめたたえていた。**

**「出会いがあれば別れもある」「春は別れの季節」などと昔から言われます。誰かと出会うということはいつの日かその人との別れを経験しなければなりません。それは進学や就職や転勤による出会いと別れと言ったものから、愛する人との死別、愛する人が死によってこの地上での命が終わりを迎え、この地上ではもう二度と会うことができないという辛く苦しい別れもあります。**

**私もこの春別れを経験しました。それは愛する人との死別といったものではありませんが、15年間住み慣れた静岡の地から諏訪に移り住むことにより、それまでいつも顔を合わせていた人たちと気軽には会えなくなる別れです。特に静岡教会の皆様には大変お世話になりましたので、3月26日の礼拝の後挨拶をさせていただきましたが、今までの色々な思い出が蘇り、恥ずかしながら感極まって涙で声が詰まってしまい感謝の気持ちを十分に伝えきれませんでした。静岡に帰った時にはまた会うことはできるのですが、それでもやはり別れというのはどのような別れであっても悲しみや寂しさがつきまとうものです。**

**本日私たちに与えられた新約聖書にはイエス様が弟子たちから離れて天に上げられる場面が描かれています。それはいわばイエス様と弟子たちとの別れの場面です。別れの場面なのですが、そこには全く悲しみも寂しさも描かれていません。悲しみや寂しさどころかここには祝福と神をほめたたえる讃美とに溢れています。だからと言って私たちの日常とかけ離れたことが書いてあるかというと決してそうではありません。今私たちが神様に捧げている礼拝です。私たちがたとえどんな状況にあっても神様を礼拝し続けて、そこから喜びが与えられて、神様を讃美して、さらに生きる力が与えられる、そんな今の私たちと今日の物語は深くつながってくるのです。**

**十字架の死から復活されたイエス様は弟子たちに現れて下さり、イエス様の復活を信じることができない弟子たちにあの手この手でご自身の復活を現わしてくださいました。そして、弟子たちに「あなたたちはあらゆる国の人々の主の復活の証人となる。父なる神が送って下さる聖霊に覆われるまではこの町に留まりなさい」と言われました。「行け」ではなくて「今は留まれ」と言われたのです。そしてイエス様は弟子たちをエルサレムから3キロほど離れたベタニアの近くに連れていきました。そして手を上げて祝福して下さったのです。手は複数形ですので片手ではなくて両手です。両手を上げて祝福して下さったのです。そして祝福しながら天に上げられました。弟子たちは突然の別れに茫然自失になることなく、それどころか今は目の前にいなくなったイエス様を礼拝し、大喜びでエルサレムに帰り、絶えずエルサレム神殿の境内で神様を褒めたたえて讃美をしていたのです。**

**この箇所で私たちの目を引くのが「祝福」という言葉がこの短い箇所で繰り返されていることです。50節「手をあげて祝福された」51節「そして、祝福しながら」とイエス様が弟子たちを両手を上げて祝福して下さっていることが繰り返し描かれているのです。**

**けれども改めて考えると、なぜイエス様は唐突とも思えるような感じで弟子たちを祝福されたのかが不思議なのです。普通私たちの感覚からすると祝福されるということは何かそれなりの理由がないと祝福されるということがないように思うのです。『広辞苑』で祝福という言葉を辞書で引きますと、「他人の幸せを祝い、また祈ること。」例文として「結婚を祝福する」と書かれています。結婚とか出産とか入学とか成人とか転勤とか、何か人生の幸せな大きなイベントがある時に私たちはその人を祝福し、反対に私たちがその立場なら祝福されるのです。つまり「おめでとう」と祝福されるにはそれなりの理由があるからであって、何もないのにいきなり「おめでとう」と誰かに言われても「ありがとう」とは言えずに「何が？」となってしまうのです。**

**この時の弟子たちは「おめでとう」と祝福される理由があるでしょうか。大切な先生でありいつも行動を共にしていたイエス様が捕まえられた時に弟子たちは一人残らず逃げてしまいました。イエス様が十字架上で死を迎えたとき弟子たちの誰一人そばにいませんでした。イエス様が死から甦られても信じることができずに、エマオまで一緒に歩いてもそれがイエス様だとわかりませんでした。目の前にイエス様が現われて「あなたたちに平和があるように」と言われても幽霊だと思ってうろたえる始末です。そんな弟子たちにイエス様は復活の証人になる、聖霊が降ると言われましたが、じゃあ果たしてどこまで信じることができているのか甚だ疑問です。そんな弟子たちです。「おめでとう」と祝福に値する者でしょうか。イエス様から祝福されるにふさわしい歩みをしているでしょうか。**

**本日の旧約聖書の個所はモーセの兄である祭司アロンがエジプトを脱出し神様が示された約束の地に向かう途中で献げものをささげる祭儀、簡単に言うと礼拝です。神様を礼拝してイスラエルの民を祝福した様子が描かれています。アロンが手をあげて祝福すると民が喜びの声をあげて神様を礼拝しました。今日の新約聖書の個所と似たような場面です。祭司アロンがイスラエルの人々にしたのは神様の祝福です。祭司アロンがイスラエルの民がすばらしい、祝福されるのにふさわしい歩みをしているからみんなに「おめでとう」と言っているのではありません。むしろ祝福に値しない歩みをイスラエルの民はしているのです。モーセに導かれてエジプトを脱出したのに、お腹が空いたとか、肉が食べたいとか、挙句の果てにはエジプトで奴隷の方がよかったとか文句ばかりです。そんなイスラエルの民を神様はアロンを通じて祝福されたのです。それが神様の祝福なのです。イスラエルの民が祝福に値するとかしないとか関係なく神様は祝福して下さるのです。**

**それは神様の最初の祝福をみるともっとはっきりします。**

**創世記1：21・22**

**「神は水に群がるもの、すなわち大きな怪物、うごめく生き物をそれぞれに、また、翼ある鳥をそれぞれに創造された。神はこれを見て、良しとされた。**

 **神はそれらのものを祝福して言われた。「産めよ、増えよ、海の水に満ちよ。鳥は地の上に増えよ。」**

**神様が天地を、この世界をつくられたことが記されている創世記の冒頭です。神様はご自分が愛を持っておつくりになった魚などの水生動物や翼ある鳥を祝福されるのです。魚であるとか鳥たちは何か神様の祝福に値する行動をしたでしょうか。ただ神様につくられただけです。ただつくられて存在する。その魚たちを鳥たちを神様は祝福されて産めよ増えよと、その存在を肯定して下さり生命の力を与えて下さったのです。その存在自体を愛して下さり、「生きよ」と力を与えて下さるのです。それが神様の祝福です。**

**その祝福をイエス様は弟子たちに与えて下さるのです。祝福にするとかしないとか全く関係ない、むしろ「まだ信じないのか」と叱責されても不思議ではない弟子たちの存在そのものをイエス様は愛して下さり弟子たちに私はあなたを愛していると命を力を与えて下さるのです。それは「私はこれから父なる神のおられる天に帰る。あなたたちと別れなければならない。私がいなくなって父は聖霊を送って下さる。その聖霊と共にあなたたちは生きよ」とのイエス様の別れの言葉と言ってもいいと思います。その祝福をイエス様は弟子たちに与えて下さったのです。そして51節の「祝福しながら」は文法的なことですが、この元の言葉は現在形で書かれています。それは両手を上げて弟子たちを祝福して下さり祝福しながら天に昇られたイエス様は今も私たちを祝福し続けて下さっているのです。**

**何の祝福にも値しない弟子たちを天に昇られたイエス様は両手を上げて祝福し続けて**

**下さっている。私たちのことを愛して下さり、生きよと力を与え続けて下さっている。それほどに大きな喜びはないでしょう。愛するイエス様を裏切りました。逃げました。イエス様の復活を信じられないでいました。そんな私たちを愛し続けて下さる愛を知ったらそれは自然と賛美が溢れてくるでしょう。そんな弟子たちの礼拝は私たちの礼拝と同じです。**

**私たちも普通に考えれば祝福されるに値しない存在です。なにもめでたいことはない。それどころか毎日の歩みの中で苦しいことが多くて、神様を悲しませ、人を傷つけ悲しませる歩みをしています。そんな私たちが今こうして神様に招かれて礼拝をしているのです。私たちをつくり私たちの存在そのものを愛して下さる神様の豊かな祝福を今もイエス様は天で両手をあげて祝福し続けて下さっているのです。私たちは今日もそしてこれからも私たちを豊かに祝福して下さるイエス様の祝福をいただいて、感謝の讃美をしていきましょう。こころを高く上げて感謝の讃美をしていきましょう。**